

当院理学療法士中畑晶博らの第 22 回臨床スポーツ医学学術集会での発表が 2012 年 2 月 16 日発行の Medical Tribune (医学情報新聞) に掲載されました。

Medical Tribune

www.medical-tribune.co.jp

2012年2月16日 Vol.45, No.7

発行所：株式会社メディカルトリビューン 東京駅前代田区丸の内2-1-30 イリア文化会館6階 〒100-0074 発行日：毎月15日発行 購読料：年額13,000円(送料別) 定価360円 ©Medical Tribune, Inc. 2012

Contents

- 海外ニュース
乳頭から乳管への抗がん薬直接投与の実行可能性と安全性を示される 5
膝注射から経口薬への切り替えで入院患者の医療費を大幅に削減 Na排泄量：多くても少なくても心血管系に悪影響—尿中Na排泄量の解析で明らか 8



ISC 2012

ステント型血栓回収デバイス SOLITAIREの優位性証明される

〔米ルイジアナ州ニューオーリンズ〕脳梗塞急性期患者で組織プラスミノゲンアクチベータ(tPA)静注療法が適応外や無効の場合、血管内治療が行われる。中でも最近注目されているのが機械的に血栓を回収する方法だ。その一つ、MERCiリトリーバルシステム(MERCi)はわが国でも一昨年に承認され保険適用となった。このMERCiとSOLITAIRE™血流回収デバイス(SOLITAIRE)のランダム化比較試験(RCT)で後者の方が優れた再閉通率を示したことが判明。2月1～3日に当地で開催された国際脳卒中学会(ISC 2012)でカリフォルニア大学ロサンゼルス校(UCLA)David Geffen医学部神経学のJeffrey L. Saver教授(脳卒中センター長)が発表した。



第22回日本臨床スポーツ医学会

〔表〕 開催地、開催期間の競技種別別参加人数

競技種別	参加人数
1. 大会2日間(東京) 日本代表選抜大会	約500名
2. 大会2日間(東京) 海外選手招待	約200名
3. 大会2日間(東京) 国内選手招待	約100名
4. 大会2日間(東京) コンタクト系(ボクシング)	約50名
5. 大会2日間(東京) 総合	約100名
6. 大会2日間(東京) その他	約50名

～バスケットボール女子日本リーグ機構～

試合での外傷は介入後、減少傾向に

手塚共済病院(神奈川県川崎市)臨床副院長・整形外科の三本英之院長(2007年バスケットボール日本リーグ機構委員長、理学療法士協会会長)は、バスケットボール女子日本リーグ機構(WJBL)における外傷発生率について報告。外傷発生率は介入前と比較して減少傾向にあることを明らかにした。

発表、2006年からリーグ大会に協力が得られた選手を対象に外傷調査を行っている。3年間の調査は2006年4月～11月までのシーズンにわたり、毎週調査結果を提出。その結果、選手総数4802人、外傷発生1471例、1000例以上の外傷発生選手は調査で418例であった。対し、試合では1041例と大半を占めたが、非試合では430例と大半を占めた。非試合では、足関節(48%)、膝関節(22%)、大腿関節(18%)、肘関節(12%)、肩関節(10%)、頸部(8%)、頭部(5%)、腕関節(4%)、手関節(3%)、その他(1%)の順であった。

これは、2007年1月には臨床スポーツ医学会整形外科学術集会からWJBLに干渉報告表を入手するためのビデオ作成を依頼。協力(DF、技、投、投、投)



～骨付き膝蓋腱を用いたACL再建術～

術後成績、競技復帰状況ともに良好

骨付き膝蓋腱(ITB)を用いた前十字靭帯(ACL)再建術は、術後早期の骨孔一時的閉塞に安定した固定力を得られることから、近年再び注目されている。同定定成院(東京都豊島区)の清水博樹院長は、ITBを用いたACL再建術の術後成績と競技復帰率について報告。術後の再発率は17%で、競技復帰率は72%と良好な結果が得られたと、同学会で報告した。

～ACL再建術後の長期的なスポーツ継続状況～

術後2年以上での継続率50%

ACL再建術後の長期的なスポーツ継続率に関する報告は多いが、長期的な継続率の報告はあまりない。本学会(日本スポーツリハビリテーション学会)の中畑晶博(理学療法士)は、ACL再建術を受けた若年層の患者の長期的なスポーツ継続率について報告した。その結果、IKT-1000の患者群は110mm、術後6ヶ月のWJBL継続率は74.7%で、競技復帰有意差は認められなかった。競技復帰率は97.2%、メット1の1例を除いて全員が元の競技に復帰した。術後の再発率が認められたのは37例(1例は7%)で、大強度力士(9例)だった。再手術は施行せず、保存的治療により、現場から再出場を待たせている。

競技復帰までの期間は平均75.6ヶ月、相対的継続率も有意差はなかった。これについては、旧氏は「大強度力士は3ヶ月が長く、骨付の存在が早期復帰への障壁となりつつあった結果ではないか。また、他の競技種目と比べてジャンプやジャンプ動作を行う機会が少ないことも早期復帰が可能となった原因と見られる」との見解を示した。

対象は阿久津エニテで2006年5月～09年3月までにACL再建術を受けた。術後2年以上経過した189例中、術前にスポーツをしていた151例(約80%)。調査方法は、アンケート用紙を送付。回答のなかった患者には電話で調査を行い、最終的に39例(男48名/10名)から回答を得た。継続率は187例(97%)、57例(99%)。調査対象は、手術後6ヶ月後の継続率(術後早期)の有無、復帰種目、復帰時の主観的満足度(スポーツ)を調査した。復帰時の主観的満足度は、満足(67%)、やや満足(23%)、やや不満足(10%)、不満足(10%)の順であった。また、多くの例で術後早期に復帰しているものの、術後2年以上経過した患者でも復帰率が高まっていることがわかった。

用いたACL再建術～ 回復状況ともに良好

EndoButton[®]、脛骨側はInterference screwを用いて移植腱を固定した。

検討項目は①膝関節の前後不安定性を定量的に計測できるKnee Arthrometer(KT-1000)を用いた最終経過観察時の徒手最大前方移動量(前方安定性)の患健差②術後6カ月でのCybexによる膝伸展筋力測定[体重支持指数(WBI)およびその健側比]③競技復帰時期-の3つ。

その結果、KT-1000の患健差は1.0mm。術後6カ月のWBI健側比は74.1%で、競技種目間で有意差は認

められなかった。競技復帰率は97.2%。アメフトの1例を除いて全員が元の競技に復帰した。術後の再断裂が認められたのは37例中1例(2.7%)で、大相撲力士(21歳)だった。再手術は施行せず、保存的治療により、翌場所から再出場を果たしている。

競技復帰までの期間は平均7.6カ月、相撲が他の競技種目よりも有意に早かった。これについて、同氏は「大相撲にはシーズンオフがなく、番付の存在が早期復帰への意欲や焦りにつながった結果ではないか。また、他の競技種目と比べてランニングやジャンプ動作を行う機会が少ないことも早期復帰が可能となった原因と考えられる」との見解を示した。

復帰時の主観的競技レベル)②現在のスポーツ活動状況(スポーツ継続の有無、種目、恐怖心など)。復帰時の主観的競技レベルはアンケートのみで調査し、術前の競技レベルを100とした場合の復帰レベルに相当する部位に線を引いてもらい、その長さから割合を抽出した。

その結果、術後スポーツ復帰は38例中36例(95%)が術前と同じ種目で復帰していた。復帰時の主観的競技レベルは、平均72±26。種目別では、レスリング、テニスが低く、柔道、バスケットボール、フットサルで高い傾向が見られた。

一方、術後2年以上経過した現在のスポーツ活動は、38例中19例(男子15例、女子4例)が継続していた。種目別では、術前に32%と最も多かったバスケットボールの継続率が8%と大幅に低下した。また、90%が術前と同種目のスポーツを継続していた。現在、スポーツを継続していない理由は、特に理由なし42%、社会的理由32%、個人的理由16%で、再断裂が怖いなど膝に関するものは10%だった。恐怖心のある動作に関しては、ジャンプ動作や踏ん張り、ストップ動作が最も多く、ほかに膝をつく、方向転換、長時間のヒール、サイドステップなどが挙げられ、多くの例で怖いと思う動作が存在した。

これらの結果について、同氏は「今回の調査では、特に女子のスポーツ継続率が低かった。また、多くの例で術後復帰しているものの、術後2年以上経過した現在でも恐怖感が残存していることが分かった」と述べた。

～ACL再建術後の長期的なスポーツ継続状況～ 術後2年以上での継続率50%

ACL再建術後の短期的なスポーツ復帰についての報告は多いが、長期的な継続状況の報告はあまりない。江本ニーアンドスポーツクリニック(福岡県)の中畑晶博氏(理学療法士)は、ACL再建術を受けた若年層の患者の長期的なスポーツ継続状況について検討。その結果、術後は95%がスポーツに復帰したものの、術後2年以上経過すると継続率は50%に低下したことを報告した。

女子の継続率は20%

中畑氏らは、スポーツ活動が最も盛んな若年層に焦点を当て、ACL再建術後の長期的なスポーツ継続状況を調査した。

同院でのACL術後のスポーツ復帰条件は、①術後の十分な経過期間[BTB:術後4カ月以上、ハムストリングス腱(STG):術後6カ月以上]②筋力が健患比85%以上③恐怖心がないこと-の3つ。

対象は同クリニックで2006年5月～09年3月末にACL再建術を施行し、術後2年以上経過した189例中、術前にスポーツをしていた15～20歳の64例。調査方法は、アンケート用紙を送付、返信のなかった患者には電話で調査を行い、最終的に38例(男女各19例)から回答を得た。移植片はBTBが29例、STGが9例。

調査項目は、①術後スポーツ復帰状況(術後復帰の有無、復帰種目、